

留学の前に考えること

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 憲一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16571

留学の前に考えること



佐々木 憲一

(ささき・けんいち)

文学部助

教授(考古学専攻)。

一九六二年東京生まれ、京都育ち。

一九九五年ハーヴァード大学人類学

研究科大学院博士課程修了Ph.D。

一九九九年明治大学赴任。

主な著作に『雪野山古墳―未盗掘

石室の発見』(新泉社二〇〇四)、

『古墳時代の日本列島』(共著、青

木書店二〇〇三)、『弥生の「ムラ」

から古墳の「クニ」へ』(共著、学

生社二〇〇二)、『海の古代史』(共

著、角川書店二〇〇二)、など

私のアメリカ合衆国での経験を知って、留学に関して相談に来てくれる学生諸君が、文学部史学地理学科はもちろん、他学科、他学部からもあり、喜ばしい限りである。留学は日本での自分の経験、学問を客観的に見つめなおす最高の場であり、若いうちに外国で勉強、研究する機会があれば、後々まで大きくものをいうからである。

しかしながら私が話を聞いていて、留学を志す多くの諸君が「留学」の現実について、あまりにも無知であることに愕然とする。何も知らずに海外に行っても、本来学べることも学べずに時間を無駄にしかねず、また日本に帰ってもその留学経験を必ずしもよく評価してくれないため、せっかくの貴重な在外経験がマイナスとなるケースもなくはない。留学が自己にとって有効かどうかは、最終的には個人の努力次第である。したがってここでは、留学がすばらしい経験となるよう、決意以前に考えておくべきことを、特にアメリカ合衆国での体験に基づき若干紹介しておきたい。

まず当然のことながら、日本語を公用語とする国は日本だけなので、留学するということとは外国語で勉強するということである。講義を聴いて理解するのも、課題図書を読むのも、ゼミで研究発表を口頭するのも、筆記試験を受けるのも、レポートを執筆するのも、

すべて外国語でこなさねばならない。数ヶ月でひとつの外国語をマスターできるような才能のある人は別として、私などは語学的才能がゼロであつたので、想像を絶する苦勞をした。毎日の授業についてゆくだけで、一日八時間以上机にかじりついて勉強せねばならなかつた。高校では授業が一日七時限あつたので、一日の睡眠時間を四時間以上確保するのがほとんど不可能だつた。宿題をやつていて、気がついたら朝起きてシャワーを浴びる時間になつていた日もあつた。大学だと、後述するように一学期に四コマ程度しか登録しないから一日授業に出ている時間が四時間程度、おかげで一日八時間以上勉強しても六時間の睡眠時間が確保でき、幸福に感じたのを覚えている。

次に、アメリカ合衆国に限らず外国の大学では宿題が日本とは比べ物にならないくらい多い。合衆国のほとんどの大学は「セメスター制」といつて、明治大学の通年四単位の授業内容を一学期一四週間でこなしてしまう。つまり、九〇分授業が週二回または五〇分授業が週三回ある。その代わり、一学期に一度に受講するのは四科目程度、一年で八、九科目くらいだから、通年では日本の大学とほぼ同じ学習量となるような印象を受ける。しかし実際はそれ以上で、講義科目一科目につき毎週一〇〇〜二〇〇ページくらいの課題文献

を読みこなさねばならない。一学期中に中間テストが一〜二回あって、さらに期末テストとして、通常時間割とは別に一科目二時間〜三時間かかる大変な試験が課される。中間テストが一回だけの講義科目では、テスト以外にA4判用紙一〇枚（日本語に翻訳すると、四〇〇字詰め原稿用紙二〇枚程度）のレポートが課されることが多い。テストがない演習科目だと、毎週二〇〇ページ以上の課題文献と、学期末に二〇枚（日本語だと四〇枚程度）のレポートを提出する。したがって合衆国では、一年でこなす学習量は日本の大学より非常に多い。

その膨大な要求の上に、日本人留学生の場合は語学的ハンディキャップがのしかかってくる。私の場合、まず早口の講義はすべてテープで録音し、自宅で再生して講義ノートを作成した。当時はウォークマンがB5判の辞書くらい大きかった時代である。毎週の課題文献以外に、多数の論文を読まないとレポートは書けなかったから、理論的枠組みは講義で習ったものを尊重しつつも、ケーススタディとしてできる限り日本の事例を取り上げるよう努めた。文献の涉猟、読解を日本語でできるからである。レポートは提出期限より早めに下書きを完成させ、英語が母国語のアメリカ人の友人に添削してもらってから、タイ

プライターで清書した。

これだけ膨大な要求にアメリカ合衆国の学生はよく応えている、耐えていると、日本人学生は不思議に思うかもしれない。合衆国の大学では、成績不良の場合、一学期間の執行猶予を経て成績向上が見られないと、文句なしに退学処分になるからである。また就職活動には、大学教員の推薦状をもらっておくと有利だから、先生方にアピールするよう、レポートのできはもちろんのこと、日々の出席も心がける。それ以前に現実問題として、一回講義を休むとその次の授業についてゆくのが難しいくらい、一回一回の講義が充実しているため、学生は一回たりとも授業を休むわけにいかないのである。

合衆国に限らず、諸外国の大学がどうしてこのように厳しいのか。それは、大学生は次世代のその社会を担う俊英として、選ばれた存在として社会が期待しているからである。やや古い統計になるが、合衆国の高校卒業生のうち、四年制の大学に進学する率は二五％くらいである。また学生自身も自分たちが「選ばれしもの」としての誇りと自覚をもっている。だから、大学の勉強がつらくとも、近い将来出世できることへの投資と捉えて、耐えている側面がある。

つまり、社会における大学の位置づけ、大学と大学生への期待が日本と根本的に異なっているのである（昔は日本の大学も諸外国と同じ位置づけであったが、近年、日本の大学のあり方のみが大幅に変質してしまったのだ）。だから、大変な勉強以上に、この意識の違いも克服しなければならない。明治大学の教壇に立つようになって、まず授業での出席率の低さに驚き、そして授業中の私語にあきれた私が「君たちは次世代の日本社会を担うエリートじゃないか」と怒ったら、一人の女子学生がすつくと立って、「そんな理想を押し付けられても困ります」と言い放った。ところが留学すると、これが「理想」ではなく、毎日の現実なのである。

まずこういった現実を認識してほしい。留学を考えるのはそれからである。ごく普通の日本人大学生にとって、留学は非常に高いハードルであると言わざるを得ない。だから、たとえば現在、明治で「うまくいかない」から、留学すれば何とかなると考える人がいるが、現実はその程甘くはない。日本の大学でうまくいかなければ、もつと厳しい環境でうまくやっていける可能性は高くない。留学にはお金もかかり、ご両親様にもご迷惑をかけることになる。それだけ投資する効果が果たしてあるのか、今一度考えてみて欲しい。